

連鎖

小桜 陰子

屋敷があつた。見上げると、右端の窓から明かりが漏れて来た。ここに一人で住んでいるという、変わり者の侯爵の噂はどうやら本当らしかった。手を伸ばすと、頑丈な扉は、ぎい、と軋んだ音を立てて開いた。

男は椅子に座つてぼんやりとテーブルに置かれた蠟燭に灯る炎を眺めていた。

「少し前の事だよ、ここに来たのは」

柔らかな絨毯の上で、赤い頭巾をかぶり胸元に白い大きなリボンをつけた少女がべたりと座り込んでいた。緑色に輝く瞳は、まっすぐ男を捕らえていた。部屋に置かれた調度品の数々は、それぞれがどっしりとした重量感を持ち細かな細工が施されていた。それは、この部屋の主が裕福な者であつたことを示していた。

こん、と男は見事な銀細工が施された蠟燭立てを指ではじいた。一瞬バランスを失つた炎は左右に揺らめいた。「こんな屋敷を持つて、肥沃で広大な領地も持った大富豪。それでいてとびきりの人格者だつたそうじゃないか、領民に厳しい取立てを強いたわけではないと」

「うん。いつもここにも一人で住んでいたけれど、しょっちゅう村には来ていたの」

「ははは、それで最近姿を現さなくなったその侯爵の安否を確かめるために、ここにやつて来たのかい？ 忠実な村娘さん」

男の高笑いに、少女はこっくりとうなずいた。

「さてさて……ここに来てからずっと無表情みただけれども、いつまでその顔が続くかね。ほら、見えるだろ？ 俺の影がどうなっているのか……」

男が指差したところには、蠟燭が照らす二人の影が映つていた。頭巾をかぶつた少女の影と、もう一つ、男の影だつた。男の影は、少女が見ている男と同じようにすりすりとしていたが、いくつかの点で余計な物が混ざつていた。一つ目は頭。男の影には牛のように短くも鋭い角が二本付いていた。二つ目は、肩から背中にかけてだつた。こうもりのような翼が、ゆっくりと動いていた。少女はごくりと唾を飲み、引きつった表情で男を見つめた。

「……悪魔？」

「あははは、わかつたらう。そうそう、その顔が見たかつたんだよ。ほら、もう足はすくんで動かないだろう？ 今から、その美味しそうなブルブルの魂を目の前で食べてあげるからね……」

男は口を開けて笑う。鋭い歯が、蠟燭の明かりに照らされてぎらぎらと輝いた。

「……わかつた」

「おや、随分と聞き分けの良い子だなあ……もつと怯えてくれないと、味気ない魂になっちまうよ。俺は薄味が苦手なんだ」

男は決して笑っていない瞳で、少女の胸元のリボンただ一点のみを凝視していた。

「ただ、教えてほしいの。領主様は？ 領主様は一体どうなっちゃったの？」

「あつはっはっはっはっは……面白い！ 自分の身より領主サマの安否のほうが大切と言うか！ 教えてやろう。そのほうがお前の魂に見事なスパイスがまぶされるようだしな！」

いつしか興奮して翼と角を生やした悪魔に戻った男は、語り始めた。

悪魔というものはどうも見事な人格者のほうへ寄っていつてしまう。もちろんそんなやつらは簡単に俺たちに魂を売り渡すようなもんじゃない。それでも寄って行くのはな、苦勞して取り出した分、最高の味がするからなんだよ。それはもう舌がとろける濃厚な味わいだ。子ども魂がプルプルした食感を楽しむ物であれば、人格者の魂は柔らかくてじゅわつと肉々しい汁を伴う味なんだ。そうさな、その変わり者の領主の噂を聞いたのは、西の都だったよ。その時入り浸っていた賭博場に、この地方出身の奴がいて、そいつから聞いたんだな、確か。長

いことその都にとどまって下衆共の魂やらはらわたやらを食べていたんだが、どうも人格者の物は食べられなくてな。俺は話を聞いてすぐにその都から出た。そこにとどまっていると、魂管理にうるさい死神共に感付かれるから、つてのもあるけどな。

しかし本当に驚いた。周りの地域では領主の贅沢な暮らしのために、領民はひもじい思いをしているつてのに、この領地ではそれが全く無くて、血色のいい農民たちが村々で収穫祭を執り行っているんだからな。村人の話からも、領主がいかに優れた人かと湛える言葉ばかりでさ、オレはもう喜び勇んで屋敷へ向かったよ。森の中に立てられたその中、たった一人で住んでいるという人格者の領主の元へな。

そいつは確かに常人の魂を持つてはいなかった。ただな、期待していた人格者じゃなかった。富に執着せず、人との接触を極端に嫌う単なる変わり者だった。がっかりしたよ。ありふれた味ではないけれど、どうも自分には合わなさそうな珍味の魂だったからな。だけでも、来てしまったんだ、食べるしかないだろう。南ではたこも食べるというからな。どんなにやばい物でも、味付けで何とかすればいいのさ。

「コホン。初めまして、ランツフート侯爵」

初対面の人間にはまず挨拶をしなければいけないというから、俺はその手順どおりに従った。蠟燭の炎を濁っ

た目で見つめる領主に対してな。けれど領主がそれに対して反応したのは、五回ほど呼吸し終えたあとだった。

「……………誰だ？ お前は」

まあ、いきなり自分の部屋に誰かがいたんだから当然だわな。

「私めは王より命ぜられ、諸州を旅して回る情報屋にして故郷を持たぬ奇術師でございます。この度はランツフート候、あなたの領地に参りましたゆえ、このように参上した次第であります」

「……………余は世間の情報などには興味ない。早く去れ」

その言葉からも、見た目どおりな偏屈人間であることに間違いはなかった。

「そんな事言われましてもね、世界は刻一刻と変わっているのですよ。情報を得ないで、あなたのような地方領主が生き残れないのですよ」

「ならば余は情報など得なくてもよい。余は決して変わらぬぞ……………変わりとうないのだ！」

その時、俺はこの領主の頭の中をのぞいたんだ。いたよ、はつきりとした形で一人の女が映っていたんだ。

「ふふふ……………あなたのような人が私の胡散臭い情報など買うはずもございませんよね。では、これなどいかがでしょうか……………」

俺は領主の目を左手で隠し、右手でぱちんと指を鳴らした。出てくる出てくる。塵芥が寄せ集められ、人の形

を作り出した。

人型が完全になるのを待つて、俺は左手を離した。それを見たときの領主の顔が忘れられないよ。どんよりと濁っていた目が一瞬にして輝きを取り戻したのだから。

「……………エレナ！」

「ほう、この方はエレナと言うのですか。おっと侯爵殿、まだ手を触れないでくださいね。あなたのものではないのです。まだ、売り物の段階ですので」

椅子から立ち上がった領主と『エレナ』の人型との間に立ち、俺は領主を見つめた。

「売り物だと？ エレナを売り物というのか貴様！」

「ええ、売り物ですよ。ですが、もちろんあなたにはこれを購入する権利があります。……………そうですね、この屋敷全と交換なら渡しても良いですよ」

領主は黙って床を見つめた。

「もちろん、この屋敷を明け渡したくなければ私もあなたに『エレナ』は渡せません。けれど『エレナ』はこれから二度と現われることはないのですから、屋敷一つで済むと思えば安いとは思いませんか？」

領主はしばらく黙っていたが、蠟燭の火が数回揺れた後に答えた。

「よろしい。この屋敷は全てお前の物だ。好きにしろ」

俺は満面の笑みを湛え『エレナ』の人型を領主に渡した。領主は『エレナ』を受け取ると、何度もその手を握

り、顔を撫でた。

「どういう事だ？ 脈も温かみも無いぞ。エレナは生きていないじゃないか！」

「ええ、もちろんですとも。そちらはまだ人形の段階ですから。私の奇術では体と命を分けてでしか出せませんから。それに、いつ、私が生きてるエレナを渡すと言いました？」

「貴様……！ 余を騙したな！ 余の屋敷を返せ！」

「全く勝手なお方ですね。いいでしょう、返しますよ。ただ、こちらにはエレナの『命』がごさいます。ほら、見えますでしょうか？ こちらをエレナの中に埋め込めば、心臓はどくどくと音をたて、肺はたちまち呼吸を欲し、体は瞬く間に熱を帯びます。エレナの人型を返してもらっても結構。ですが、それでしたらこの『命』も要りませんよね」

エレナの人型を抱いて、領主は再び黙りこくった。見開かれた瞳は、俺の手にある赤味を帯びた丸い光——つまり命——ただ一点を見つめていた。

「命、ですから今度は少しお高めになりますよ……あなたの領地全てと引き換えになりますから。けれど、これを安いととるか高いととるかあなたは次第ですね」

同時にきちんと指を鳴らすと、人型は髪の手先から白い塵に戻っていく、はらはらと崩れ始めた。

「人型は所詮塵芥の塊。接着剤としてこの『命』を入れ

なければ、ものの数分で崩れ去ってしまうでしょう」

領主はその言葉を聞き終えたとすぐに答えてくれた。

「貴様に余の領地をすべてやろう！ 頼む、エレナに『命』を入れてくれ！」

「その言葉、しかと耳に入れましたよ。いいでしょう……ほら、あなたご自身がお入れになってください」

俺が投げた『命』は、緩やかな放物線を描いて領主の掌の中に納まった。領主はそれを恐る恐るエレナの胸元に持つていった。柔らかい光が、人型の中に吸い込まれていった。

ぴく、と一つ小さな震えを起こした後、ひゅうひゅうとエレナの口から呼吸音が漏れ始めた。俺にとってはなんてことも無い『生き始め』がエレナの人型に起こっただけのことだった。

「エレナ……生きている！」

領主が喜んだのもそこまだった。領主がエレナの体を揺ると、エレナは首をがくりと落とし、それきり動かなくなつた。

「なぜだ？ なぜ余を見つめてはくれぬ？ こんなにも体は温かいのに……」

「簡単ですよ。人が人であるためには、体、命、そして魂が必要となるのですから。魂は体から出るとき命と一緒に出て行きますが、生き始めるときはバラバラに入るのでですよ」

「貴様、またしても余を騙したのか！許さぬっ！」  
 「許さないとところで、あなたは私に何が出来るんです？  
 たった今、この屋敷と領地は全て私のものとなりました。  
 あなたに残された物はあなた自身とエレナのみなのです  
 よ」

その時見えた領主の魂は、見事なまでの味付けが施さ  
 れていた。あと少し、飾り付けをするだけで俺の訪問は  
 達成される……。

「ふふ、悔しそうですね。では最後に、エレナの魂をあ  
 なたにあげましょう。もちろん、タダではありませんよ」  
 「貴様、何を言い出すのだ……」

「格安価格でのご提供です。魂は、魂で代金を払っても  
 らいましょう。あなたの魂を賭けてもらいます」

「……はっ、何を言い出すのだ。なぜ貴様が余の魂など  
 ……」

「あなたの魂を引きずり出すなど容易い事。私は悪魔で  
 すからね」

軽く翼を伸ばしたときの、領主の顔は忘れられない。  
 見事に恐怖に彩られ、口からは声になる寸前の息だけが  
 荒い呼吸音として出てくるのだから。

「貴様、悪魔だと……？ならば余はこの賭け、行いうけ  
 にはいかまい」

俺はその言葉を聞くと、こほんと咳払いして答えた。  
 「賭けに応じようと応じまいと好きにすればいいでしょ

う。ただその自分勝手な脳みそに刻み付けてくださいな、  
 一度悪魔と取引すれば、遅かれ早かれ魂は悪魔の腹に収  
 められるって事を。どちらに転ぼうと、あなたはもう一  
 文無し。エレナと共に、行きたいところへ行けばいい。  
 尤も、魂の無い人間は持つて三日でしょうけど」

「持つて三日だと？」

「そうそう、三日。その期間が過ぎればたちまち腐り始  
 めてポロポロ取れていきますよ、手とか足とか」

領主は再び黙りこくりに、じつと腕の中の生き人形を見  
 つめていたよ。丹念に顔やら髪やらを撫でつけていた。

「……賭けに応じよう」

領主は言い終えると、今度は俺をまっすぐ見てきた。  
 驚いた。あの無気力だった領主の瞳に、人並みの欲望が  
 ざらついていたんだ。

「ふふっ、それでこそ人間……。よろしい。ではここに、  
 青と赤のガラスがあります。これが魂で、生き始めに近  
 づければたちまち体に吸い取られる。色とかガラス型に  
 したのは便宜上ですけどね。まあ、ここに二つあるとい  
 うことはわかるでしょう？どちらかがエレナのもので、  
 残りが人間以外の生物の魂ということですよ。どちらか好  
 きなほうを選んで生き人形に入れてください」

俺の手の上に載せた二つのガラス玉を、領主は迷いが  
 ちに見つめていた。不意に青のガラス玉へ腕を伸ばした  
 かと思えば、急に赤のほうへ変え、それでも決まらず手

を引つ込める。それが三回ほど繰り返されたときだろうか。

ついに伸びた領主の腕は、迷うことなくまっすぐに青のガラス玉を掴んだのだった。

「さあ、エレナの生き人形に入れてみなさい」

俺が急かす間もなく、領主はガラス玉をエレナの胸元に当てた。太陽が地平線に沈むかのごとく、最初はゆっくり、そして急に入ってしまった。

「あ、あ、あ……」

エレナは大きく身震いし、その衝撃で領主はエレナを離してしまった。

「エレナ！ 余だ！ 余がわかるか？」

「あ、あ、ああああ……」

床に放り出されたエレナは、四つん這いの状態で、部屋の隅へと走っていく。

「なぜだ？ なぜ余を避ける？ エレナ、余だぞ」

部屋の隅に走っていったエレナを追い、領主も走る。

俺は部屋の隅に固まっている二人へ向かって、ゆっくりと歩いていった。角や尻尾を出しながら、顔だけは穏やかな情報屋を繕っていた。

「おやおや、どうやら不純な動物の魂を入れてしまったようですね。これは、たぶんハツカネズミかな？ 残念、エレナの魂はいただきます。もちろん、あなたのもね」  
恐怖と絶望で彩られた顔は、見事な飾り付けを晚餐に

施してくれた。あっさりとした甘さのエレナの魂は、素晴らしいデザートになってくれたさ……。

語り終えると、男は思い出して舌なめずりをした。男の目の前にいる少女は、震えながら尋ねた。

「……それで、領主様はどこへ行ってしまったの？」

「ああ。あれから三日も経たずに腐り始めてさ、見えるだろう？ 右後ろの隅っこ、立派な白骨になってもらったよ」

「それじゃあ、エレナさんはどうなったの？」

「さあ。領主が腐ったときには他のやつらと一緒に食っていたみたいだけど、一週間もしたら消えちゃった。

ま”二十日”ネズミだし、屋敷のどっかで死んでるんじゃないか？ 大体、そんな事を知ってどうする気だ？」

少女はまっすぐ男を見つめながら、ぼつりと答えた。

「理由が欲しいから」

「理由？」

「そう、理由」

「あはは、何言ってるのかわかりやあしない。魂取られるって間際に、何を言ってるんだ」

高笑いする男を前にして、少女は深くかぶった頭巾の下で口元を大きく歪ませている。

「理由が欲しいの。お前を裁く理由がな」

男の目の前で、少女は変貌し始めた。エメラルドのよ

うに輝く瞳は黒い眼窩の奥に吸い込まれ、ぼってりとした赤い唇は不自然なまま吊り上って消滅し、血色のよい肌は骨のように白くなったそれにとって変えられた。その姿はもはや少女ではなく、不自然に肉の付いた髑髏の形へと変わっていた。

「ようやく見つけた。時間感覚は悪魔のまま、それ以外の感覚は人間と同じかそれ以下にまで落ちているとは思わなかった」

「死神！ 来るな！ 俺の魂は決して渡さない！」  
「私だってそんな物じゃない。大丈夫、ただ刈るだけだから」

死神は鎌に変化した両腕を交互に振り下ろした。一度目は体と魂を切り離すため、二度目は切り離された魂が再び体に戻らないよう、切った根元に特殊な薬を塗るため。

悪魔の体から切り離された魂は、ゆっくりと上へ昇っていく。蠟燭の光が、紫色の飴細工のようなそれをゆっくりと照らし出していた。

葛が絡まり、戸は腐った屋敷を背にして、白いりぼんと赤い頭巾を被った少女は歩き出す。

「領主が消えてすぐ、この国は戦争に巻き込まれた。それから百年も経って領主のことを心配するような領民は

もういないのに……」  
月が照らす森の中へ、少女は消えていった。